

【別紙資料】

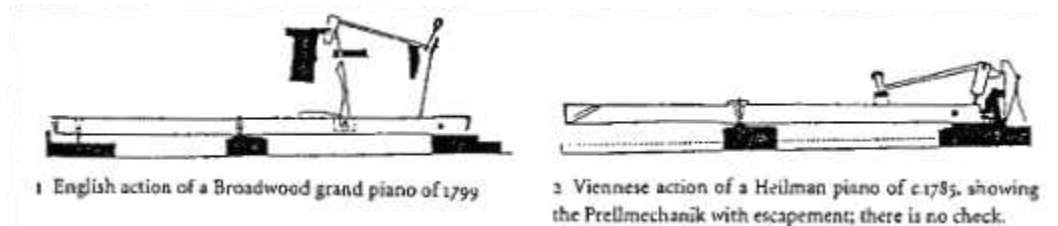
バート・ヴァン・オルト 『ハイドンと英国古典ピアノ様式』 より

※関連部分抜粋

○英国ピアノ様式とウィーン古典派のピアノ様式

○英国ピアノの構造

・アクションとタッチ



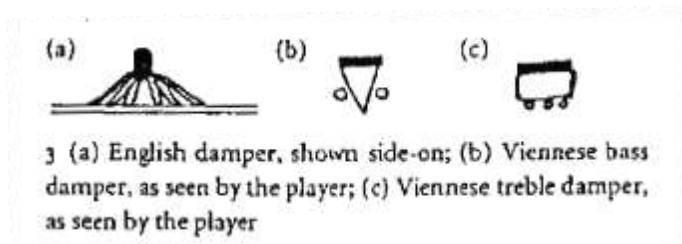
1828年 Hummel の記述・・・英国ピアノとウィーンピアノについて

ウィーン楽器は、最も軽やかな手によって簡単に演奏できる。大きい努力を払わなくても・・・速度を妨げることはない。・・・英国アクションは公平に判断しなくてはならない。なぜなら、音色の持続性と豊かさのためにである。しかし、その楽器はウィーン楽器のような流暢さと同じレベルにあるというわけではない。それは明らかにより重く深いキータッチのせいであって、その結果、ハンマーのエスケープメントには十分な反復演奏の速さがない。

1804年 Härtel の記述・・・クレメンティの受けた印象

アマチュアで、特に演奏会でしばしば演奏したり、あるいは強い伴奏をする多くの人たちにはあなたの方の楽譜より強く豊かな音を求めており、イギリスやフランスの楽器あるいは Schanz-Müller の楽器、それに他のドイツの工匠たちの楽器を持つようとしている。それらの中で例えば Clementi や Dussek 派出身のピアニストはすべて、それに特にロシアと北ドイツのピアニストたちがそうである。Clementi 氏はドイツやロシアなどを旅行してきたばかりだがこの印象を強くした。彼は 2 か月間われわれと暮らし、彼の弟子 Klengel にしたように自分が使う楽器をわれわれのストックの中からタッチに関して最も強く、頑丈な楽器を選んだ。・・・

・アフター・リング（ダンパー）英国ピアノの残響



1823年 Crelle の記述・・・英国ピアノについて

ときにはフォルテピアノに打弦で共振、いい換えれば音はシャープに消音されない複数の弦が要求される。これはたまに楽器が歌うといわれる。しかし、実際のところ、そういった歌は美しくない。・・・そのようなきちんとダンピングしないピアノで急速に転調する曲が演奏されると、実際きこえるのは不明瞭な混乱したノイズ以上のものではない。

1777年 モーツァルトの記述・・・シュタイン・ピアノについてのモーツァルトの感想

まず Stein のピアノのことから始めなければなりません。Stein の仕事ぶりを見るまでは Späth のクラヴィーアがベストだと思っていました。でも、今は Stein の方がそのレーゲンスブルクの楽器より消音され、私の好みといわねばなりません。

1824年 Kalkbrenner の記述・・・グラフ・ピアノについて

1824年、ウィーン訪問のはじめの15日間、私はピアノを弾いて全く当惑していた。私の提案による Conrad Graf 氏という最高のドイツ人ビルダーのピアノである。あらゆる努力にもかかわらず、私の好む単純な歌うフレーズがうまくできなかった。もはや高音の2オクターヴはほとんどダンピングできないが、最高音域のダンパー・レールの下へコルク片をつけるアイデアが浮かんだ時は公開をキャンセルするところであった。これで音と音の間が乾いて途切れることを避け、私の望んだような効果がうまくできた。

○高音・低音間のバランスと高音の音色

- ・英国ピアノは、高音が力強く低音とのバランスが良い。(弦が全域に2、3本張れる)
cf. ウィーンピアノ

1797年 Milchmeyer の記述・・・ウィーンピアノについて

比較すると概してグランド・ピアノフォルテは最高音域の2オクターヴが美しくクリアで、浸透する音であることはめったにない。ところがバスが極端に強く高音が弱いので、そのような楽器は例えていえば、不似合いな服装の紳士に見事に着飾った召し使いが従っている、あるいは身長7フィートの男が子供の声を出すようなものである。

1823年 Moscheres の記述・・・グラフとブロードウッドによるコンサートについての回想

Broadwood の覆われたような音色であったが、私が自作のファンタジアで幅広い、たっぷりした価値をあらわそうと試みた・・・しかし徒労であった。わがウィーンの聴衆は同邦人に忠実であり続け、・・・透明な鳴り響く Graf がより耳に心地よかったのだ。・・・

○様式：基本的タッチ

- ・残響の長い英国ピアノとアーティキュレーション

当時、旋律のインタービレ傾向から、タッチはレガート嗜好へ

1801年 クレメンティの記述・・・レガート奏法について

作曲家がレガートとスタカート奏者の好みに任せるときの最適な解決法は、もっぱらレガートにすることである。スタカートは時たま別のパッセージに生氣を与え、レガートのさらなる美しさを引き立たせるためにとっておく。

ツェルニーの記述・・・英国ピアノのタッチについて

当時の英国のフォルテピアノは豊かな長く歌うことという最も抜きん出た特質をもっていたものの、速い演奏では個々の音のはっきりしないし、深いキーディップ、重いアクションである。おのずと Dussek や Cramer その他の作品が、ソフトでおとなしく計算された表現の方向に向かう。・・・

※「オクターヴ旋律」の例

ドゥセック 《ソナタ op.18 no.2 2nd mov.》

ハイドン 《ピアノ・ソナタ Hob.XVI/51 1st. mov.》

ショパン 《スケルツォ No.2》

○「カウンター・レゾナンスの記譜」

・残響の長い英国ピアノの音符を短く（鋭く）切るための指示

つまり、「ウィーン・サウンド」のために残響を消すための指示 ex.スタッカート

※ハイドンにおける例

《ピアノ・ソナタ Hob.XVI/50 1st. mov.》の指示

6 Haydn, Sonata, Hob. xvii/50, 1st movement, opening

Allegro

SONATA



《ピアノ・ソナタ Hob.XVI/52 Finale》の

Finale, Presto



《ピアノ・ソナタ Hob.XVI/32 Finale》の指示

Finale
Presto



○ダンパーペダルの使用

- ・「英国サウンド」と過度なペダル使用の容認

Kalkbrenner の記述・・・ロンドンにおけるペダル使用について

Dussek や John Field、Johann Baptist Cramer は、Clementi の築いた一派のリーダーたちであったが、和音が変わらない間フォルテペダルを使わせた。特に Dussek は公開演奏でダンパーをほとんど瞬間的に上げ、それが顕著だった。

※例

ジョン・フィールド 《ノクターン》

ハイドン 《ピアノ・トリオ（ロンドン・トリオ） Hob.XVI/50 1st. mov.》（唯一の出版譜）



○名人芸とグランド・スタイル

・英国ピアノの表現力：名人芸とグランド・スタイルの出現

1802年頃名人芸の時期を迎える、との記述（著者不明）・・・ピアノと名人芸について

広く愛されているピアノフォルテは名人芸のピークにあり、ギャラントな 3 人：Clementi、Dussek、Cramer を擁している。

・「英国風ドラムバス」の多用

※例

ドゥセック 《ソナタ op.39 no.2》、クレメンティ、クラマー



ハイドン 《ピアノ・ソナタ Hob.XVI/52 Finale》



・「オーケストラ的」（スコアの）書法：広音域に及ぶ（多声的）旋律、パッセージ、和音 etc.の書法
→英国ピアノの表現力とグランド・スタイル

※ハイドン 《ピアノ・ソナタ Hob.XVI/52 1st. mov.》

SONATA. *Allegro*
Haydn Op. 74

for. pizz. for. pizz. for. pizz. for. pizz. for. pizz.

17 Haydn, Sonata, Hob. XVI/52, 1st movement, bars 38-40

pizz. for. pizz. for. pizz.

[出典：バート・ヴァン・オルト著『ハイドンと英国古典ピアノ様式』（東京コレギウム出版）]